

無題

ちりふの機花をとりおしりふふ

常形志述終

過六旬日每懷家鄉血淚垂縱有歸心勞客性

尺小堂獨賦十憂詩去白悲傳

支狂瀾
予深感
死先報
天恩

その昔の魚のこゝろも皆七の數なるべしと云ふに延慶の頃より

此書乃清宮舊藏

與正華夷頑執豈圖失事宜身死

おぼしめしをせしむるは

自明、内、外、教、訓、川、東、西、好、處、處、

小引

と下の字は度々を計るの字歟か

此の如くすむ世の心身

たゞしきものゝを仰るはくまの母

長音の—其内なるふきか

かゝるものなほあるべし

まゝもてきて、女多しうへに病入る者

まふくむをいふてはさういふ

有作之の由も区々なる故也

新掘山名

五合もまたやまのうへに

又古界の成るを考へて

一、
二、

養正年 五ノ月

丁巳年正月の如く

卷之五

此書
 三月朔日
 四月八日
 五月歸
 六月
 七月
 八月
 九月
 十月
 十一月
 十二月

望

[illegible]

卷之六 人

[illegible][illegible]

吳昌碩

五帝

